



5月25日から6月1日の8日間、文科省科研費プロジェクト（代表者：生源寺真一東京大学教授）の一環として、中国雲南省で農村調査を実施した。小生にとっては今回で9回目の中国だが、雲南省は初めてである。

中国に来ると、いつも食べ物の美味しさに関心させられるが、その後にくる生理現象が悩みの種だ。汲み取り、紙なしは当たり前としても、個室の扉がないのにはホトホト閉口した。このときばかりは、今年の3月に改装された政策研のトイレが思い起こされた。

雲南はベトナム、ラオス、ミャンマーと国境を接する中国西南部の省で、大半が高地从ら成る。面積は日本よりも少し広く、人口は4,300万人、省都は昆明市である。農業が主要な産業で、一人当たりGDPは31の市・省のなかで28番目と低い。この省をもっとも強く特徴づけているのは民族の多さである。総人口の3分の1が26の少数民族から構成されている。

われわれの調査地は昆明市周辺と、省南部の紅河哈尼族彝（イ）族自治州であり、後者には想像を絶する規模の棚田がある。北京から甘粛省に向かう途中、上空から見下ろした万里の長城、山水画を地で行く安徽省の黄山とともに、この景観は小生にとって強く印象に残るものとなった。

今回の調査目的は、中国農村における共有資源の維持・管理について、その問題の所在を明らかにし、今後の調査方針を決めることにある。Hardinが「共有地の悲劇」を指摘して以来、この領域には多くの関心が集まり、学際的な研究も精力的に行われている。小生がかつて客員研究員として所属していた

IFPRIでも、大塚啓二郎教授を中心として大がかりなプロジェクトが組まれていた。政策研でも複数の研究員がこのテーマに取り組んでおり、「多面的機能」プロジェクトの小課題でもある。

共有資源（local commons or common property resource）とは、森林、放牧地、灌漑・地下水、漁場などを指す。多くの人々がこうした資源に依存しながら生活しているため、そこへのアクセスを制限することは困難である。にもかかわらず、社会全体で利用できる資源の量は限られている。つまり、利用者の排除は困難であるけれども、消費が競合するといった点で、コモンズの属性は純粋な公共財とは異なっている。われわれが扱うのは森林保全と灌漑用水であるが、それが密接にリンクしており問題を複雑にしている。

当地の稲作は山頂の森林を水源とする単純な重力灌漑に依存している。水源に近い農村が森林を伐採し水田を拡張すれば、下流農村では灌漑用水が不足する。全体の生産量を増加させるためには、資源を投下して森林の保全に努めなくてはならない。つまり、上流農村では生産活動を制限しなくてはならない。そのコストを誰が負担するか、灌漑用水の供給について農村間でどのような合意が形成されるのか。これがポイントである。

過去の実証研究によれば、経済的・社会的な異質性が域内に少なく、定住の歴史が長く、人口が稠密で資源制約が severe で、市場経済の浸透度が弱く、資源を利用する集団の規模が小さいほど、共有資源は自治的な組織によってうまく管理されるという。

当地に即して考えると、上流農村と下流農村との間で民族が異なれば、合意形成は困難かもしれない。非農業就業機会は下流農村でも未だ少ないが、稲作から商品作物への転換が見られる。稲作からの離脱は合意そのものを無用なものにするだろう。集団の規模については流域の長さに依存する。当地の稲作は200年以上の歴史をもつから、「囚人のジレンマ」を回避できる下地がすでに出来ているのかも知れない。モデルの構築、データの収集、仮説の検証が今後の作業である。